

50歳で 東大に入学した 安政真弓さん

ちょうど5年前、50歳で東大に合格した主婦。のニユースが、世間をにぎわせたことを覚えていたのだろうか。安政真弓さんが、1年間のフランス留学を経て、伝統のガウンを脱しながらい東、卒業を迎えた。受験を決めたあの日に人生が180度変わった。お金にも環境にも、決して恵まれていたわけじゃない。それでも50歳で単身上京し、東大生となった、本当の理由は――。

「東大受験のとき、私の前の席に座っていたのが、ママさん。ビックリしました。10代の受験生なのかで、すごく目立っていましたから！」

5年前、50歳で東大に合格した主婦。として話題になった安政真弓さん（55）。ママさんとは、東大の同級生のあいだでの彼女のニックネームだ。同級生のじゅんさん（28）は、初対面の印象を笑顔で振り返る。

「家に帰ってから、母にすぐママさん、のことを話しました。」「お母さんと同年代の人がいたのよ！でも、普通に東大を受験するくらいだから……もしかして老けて見える30代かな？」って（笑）

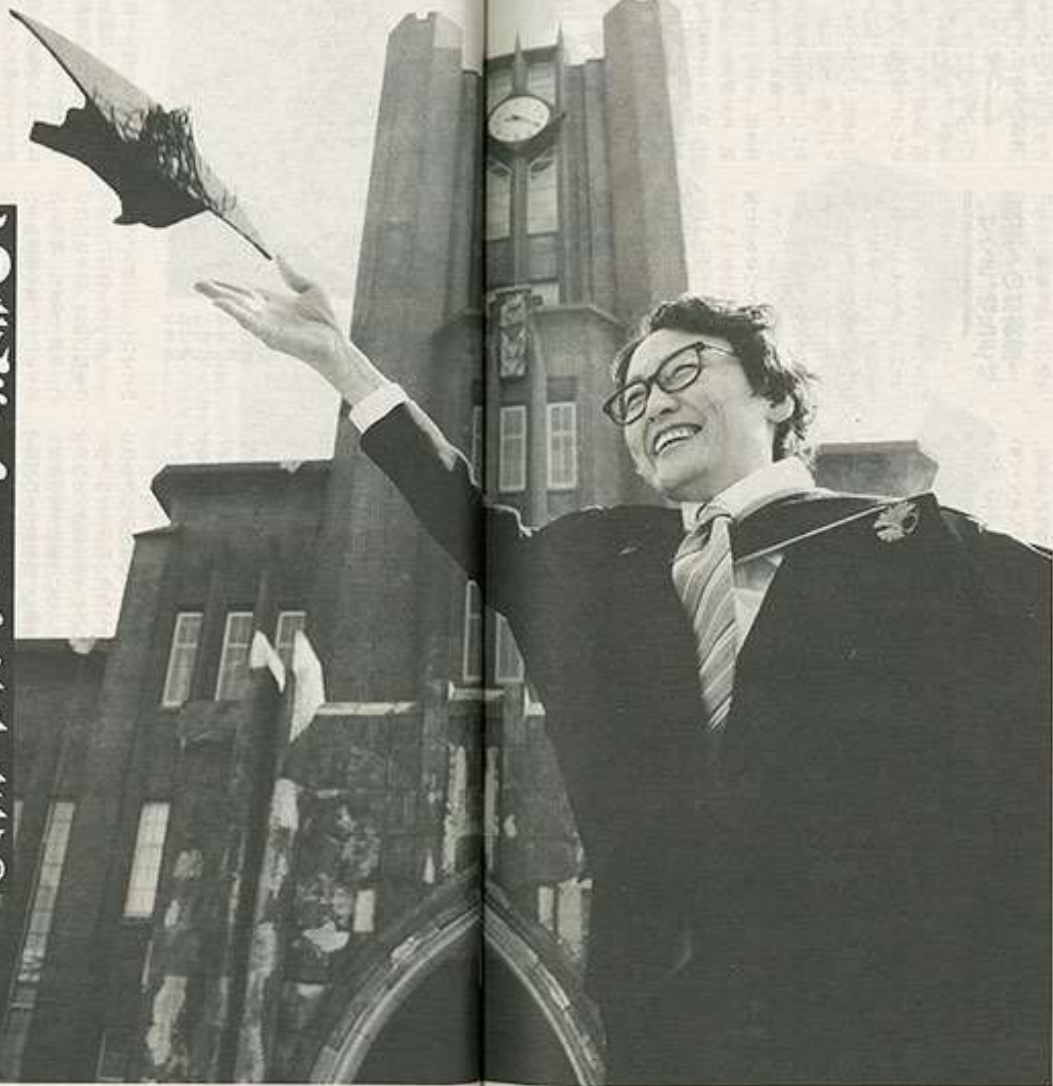
同じく5年前の教室の様子を語ってくれたのは、同級生の真式新太さん（23）。

「安政さんとは、世代を超えた友人なので正直に言いますが、最初は『アウ』してクラスにおばさんが1人交じっているんだ」と思いました（笑）。

もっと驚いたのは、彼女が（東京西部の）三鷹市の東大

まだ、 まだ、 まだ、 まだ！

55歳で、また卒業。



スリズ間

（後編）

安政さんは昭和11月21日、兵庫県豊岡市の出身。共に教える仕事をしていていた父（81）と母（83）、そして妹（53）、弟（67）の5人家族の長女だ。「父は高校の数学教師、母は洋裁の先生、四期的に見たら非の打ち所のない、私にとっても愛に正しい両親でした。でも、子供のころの私は、いつも母に怒られていました。靴の脱ぎ方が悪い、飲み物をこぼしたなどのささいな理由で、母は感情的に爆発し、酒

火のごとく怒鳴るんです。いつしか、つねに人の顔色を見る子になっていましたね」。中学生になると、ひそかにある決心をする。「『母に逆らわない人生』を送ると決めたんです。都合のいいことに、私は勉強ができた。受験で成績がよければ、母はいつもニコニコしている。怒ったときの恐ろしい顔を見ずにすむなら、そのほうがラクだと思っただけです」。服装も、食べ物も全部、母の好みに合わせた。「私とあの子は、おなじ趣味なのよ」。母は、余り人ごとをうけられそうに自慢したという。

地元の名門私立高校を卒業後、東大を受験するが不合格。2浪の末に、早稲田大学第一文学部へ進学した。卒業後は故郷で学習塾に就職。見合ひ結婚をする。「たゞさん子供を産みたかっ

たので、仕事は続けませんでした。たまたま出会った人に従うのも、振舞ってお見合いでも初めから決めて、好きな人と理想の将来像を苦勞してすり合わせるより、理想の家産像が同じ相手を最初から選ぶほうが、効率がいいでしょ（笑）。進路では、全部で4回お見合ひしました」。

設計士の夫・片岡昌司さん（60）とは写真などの趣味が合っただけでなく、夫婦別姓で暮らしたいという安政さんの希望も不思議がらなかった。26歳で入籍して以降、通称では安政姓を名乗った。ちなみに、33歳でパスポートを取るときに、本名の名前がいいと考え、大層話し合いの末に「ペーパードレス」。現在は口癖上も安政姓だ。

結婚の翌年に長男の片岡悠一郎さん（27）、3年後に次男の安政玲二郎さん（23）が誕生する。「仕事と育児の両立は考えませんでした。子育ては自分で行うべきだった。子供が、日々成長していく姿を窓辺に見られることほど、貴重なことはないと思っただけです。勉強は好きだったんで、時間があるときにフランス語の勉強などを続けていました」。

子供たちの幼稚園は、ある程度大規模の3年保育。田舎を併つたなど、義が関わる行事が多い幼稚園だった。しかし、園ママ生活を余りむ一方で、かつて自分が母親にされていたように、わが子にも厳しく勉強をさせていた。

「私とあの子は、おなじ趣味なのよ」。母は、余り人ごとをうけられそうに自慢したという。

「母は、いわゆる教育ママで、2歳7カ月から『公文式』を始め、小学生になると1日5〜6時間、勉強していました。ただ、母自身がどうもテールで語学の勉強などをする姿を見ていたので、

成長を助けて感じられる子育ては「おもしろい」と思い続けていたが、賢くも長所を伸ばしてあげたい自分も、写真が趣味の安政さん撮影。長男は片岡悠一郎。次男は安政玲二郎と弟妹たちがアヤだと思っただけです（一度もない）。



備え付けのベッド、狭小のキッチンとユニットバスのワンルーム。勉強はどこでもできるの信念から家の部屋の数とも関係は快進



中学の卒業式に参り、このころには母に逆らわない人生を送っていた安政さん（左）と妹（右）が写った写真を見せてくれた



見合ひ結婚後と結婚直後を撮った写真。家や車もすべて母のペースで買った。自立した結婚生活はいまも続いている



成長を助けて感じられる子育ては「おもしろい」と思い続けていたが、賢くも長所を伸ばしてあげたい自分も、

人生で来た基礎がある。だから、失敗を恐れることもない。心算されるものがある。ほとんど挑戦したいです」。有言実行。安政さんは50代に突入した自らの可能性を広げ続けた。やはり記事にもあった夫との「4年だけ」という期間に1年を追加して、夢だった海外留学も果たして、5年間の大学生活を全うした。1年生のときには、夢のひとつつでもあった本の出版も実現。チャレンジする人へのエールも込めて「普通の主婦だった私が東大に合格した夢をかなえる勉強法」を出版した。もう少し、年若い同級生たちの証言を聞いてみよう。

「いつも、いちばん前の席で授業にノートを取ってました。授業中だけでなく、講義後も必ず先生を追いかけて質問攻めにしていました。その質問も的を射ていて、クラス中

の尊敬を集めていました。真実さんが言えは、じぶんさんもこう語る。「キャンパス内を歩きながら辞書をめくる姿も、外国語はラテン語やサンスクリットまで8カ国語を習得したと聞いて、もう感動でした」。あれから5年ぶりの春が近づいてきた。卒業と新たな進路のときを前にして、安政さんは、東大での学生生活を、こう振り返る。

「4つの有意義なことがありました。まず海外留学。そして、一流の先生と出会って学びの基礎を築いたこと。自宅「中学生のときに決めて逆らわない母に従い、決して逆らな

「母に逆らわない母に従い、決して逆らな

母に入っていると同じとき、安くて外国人留学生も多く、汚いものを多く持っている。大生も嫌がるのに、30代の女性が生活している。さらに「快通」という人から。でも、すぐに納得しませんでした。彼女は勉強が大好きで、ほかのことは構わないんだと。兵庫豊岡市に移らず、ふつうの主婦だった安政さんが東大受験を決意したのは、次

男が第一志望の東大に落ちたことがきっかけだった。実は、かつて安政さん自身だけでなく、さかのばれば弟もチャレンジして夢続けており、まさしく東大合格は一族の悲願でもあった。その悲願を果たした5年前の入学時、いち早く取材していたのが本誌。当時の記事のラストにはこうあった。「私たち世代は、これまでの

人生で来た基礎がある。だから、失敗を恐れることもない。心算されるものがある。ほとんど挑戦したいです」。有言実行。安政さんは50代に突入した自らの可能性を広げ続けた。やはり記事にもあった夫との「4年だけ」という期間に1年を追加して、夢だった海外留学も果たして、5年間の大学生活を全うした。1年生のときには、夢のひとつつでもあった本の出版も実現。チャレンジする人へのエールも込めて「普通の主婦だった私が東大に合格した夢をかなえる勉強法」を出版した。もう少し、年若い同級生たちの証言を聞いてみよう。

「いつも、いちばん前の席で授業にノートを取ってました。授業中だけでなく、講義後も必ず先生を追いかけて質問攻めにしていました。その質問も的を射ていて、クラス中の尊敬を集めていました。真実さんが言えは、じぶんさんもこう語る。「キャンパス内を歩きながら辞書をめくる姿も、外国語はラテン語やサンスクリットまで8カ国語を習得したと聞いて、もう感動でした」。あれから5年ぶりの春が近づいてきた。卒業と新たな進路のときを前にして、安政さんは、東大での学生生活を、こう振り返る。

「4つの有意義なことがありました。まず海外留学。そして、一流の先生と出会って学びの基礎を築いたこと。自宅

「母に逆らわない母に従い、決して逆らな

「老けた!?!」原因は薄毛かも

女性のための薄毛治療
東京ビューティークリニック

髪の毛のボリュームで見た目年齢が変わる!

Check

- ✓ 抜け毛が多くなってきた
- ✓ 髪に艶がなくなってきた
- ✓ 髪にボリュームがない
- ✓ 地肌が目立ってきた
- ✓ 毛が細くなってきた

⇒女性薄毛は早めの診断が大事!

ぜひお試しください
カウンセリング
無料

マイクロスコープ検査診断 & カウンセリング

院数No.1/安心の45院

東京ビューティークリニック 検索

0120-820-417

電話受付時間:年中無休/9:00-21:00
※受付時間(受付時間)は各院により異なります

院数No.1/安心の45院

東京ビューティークリニック 検索

0120-820-417

電話受付時間:年中無休/9:00-21:00
※受付時間(受付時間)は各院により異なります

新しい魅力と野心に溢れた才能を求めます。

日本ミステリー

文学大賞

新人賞

正賞 シェラザード像
副賞 500万円

2017年5月10日締切(当日消印有効)

【審査委員】



【募集要項】

種目 ①広義のミステリーで、日本語で書かれた
自作未発表の小説。
枚数 ④400字詰原稿用紙換算で350枚から
600枚まで。
発表 ④2017年10月下旬(予定)の選考終了後、
発表、「小説宝石」2017年12月号誌上に結果・選評を掲載。
賞 ④正賞 シェラザード像
副賞 500万円
宛先 ④〒171-0014
東京都豊島区池袋3-1-2
光文社ビル内
光文社文化財団文学賞係
※詳細はホームページをご参照ください。

主催/光文社文化財団
tel. 03 3936 3024
http://www.kobunsha.com

良自冊 (66)

存在だった。

「自分が母にされていたことが、息子を支配しようとしていたのかも知れません。息子もわりとできがよく、幼稚園から二次関数の方程式を解かせていました。やりすぎで、すよね。将来、姉が東大に入れば母が喜ぶ」という考え



海外留学では習得だけでなく多くの発見もあった。日本と違いみんな楽しんでいる姿を見ていました。

がどこかあった。息子は、すまないことをしました。このころに、自分の行動基準がすべて、母が喜ぶかどうかにあることになった。また、次男が幼稚園に入ったとき、ママ友になったAさんが、安政さんの母にそっくりだった。最初はふつうに仲よくしていたが、次第に何をしても安政さんに命令し、支配しようとするようになった。

「あなたの問題の根本は、Aさんとのトラブルではなく、実母との関係。共依存です。この言葉が、ストンと胸に落ちた。共依存とは、特定の人間関係に過度に依存してしまおうとして、他者の好意を得ようとして自己を犠牲にしようとする。他者の好意や他者自身をコントロールしたりと、互いに依存することで安心を得て、正念を判断できない精神状態だ。安政さんは、ずっと母と共依存状態にあったのだ。」

医師から、母をクリニックに連れてくるようにと言われ、恐る恐る母親に話すと……。「そんなことを言う医師は頭がおかしい」と激怒し、聞く耳を持たずませんでした。母は近所に住んでいましたから、その後は電話が鳴るたび、ブルブル震えていました。母の声を耳にすることが怖かった。同時に、母と離れることは、自身ももたれるような恐怖でもあったんです。

「本を読んで、共依存にはわが子への連鎖の恐れがあることを知るんです。息子たちのために、自分で断ち切らなければならぬと思いました。新しいことを始め、自分の基準で判断するリハビリの日々が始まりました。まず、自宅で中学生向けの塾を開講。英検や仏検にチャレンジし、海外に一人旅に出かけ、陶芸の勉強も始めた。集中して勉強していると、自分の中にこだまする母の声を振り払える。さらに素晴らしいことに、新しい世界が広がる喜びがある。

次男の玲二朗さんは言う。「母は、一度やり始めると、とことん集中するタイプです。アップルパイに凝っていたときは、料理本で研究したり、食べ歩きをしたりで、おやつが毎日、手作りアップルパイだったこともありませぬ(笑)。」



母の留学先を訪れた息子たちは世間体を忘れることのできるフランスで母が日本以上に生き生きと生活していることを喜んだ



次男の玲二朗さんと一緒に東大生になる夢はかなわなかったが、東京在住の大学生同士でよく食事を共にするアマミリー



安政年下の同級生、真武さんと卒業記念ディナー。「環境のせいにして言い訳しない安政さんの今後に期待し」



夫婦それぞれが自分の表現を伸ばした娘の自習室には、家族それぞれが自由に生活するアマミリーの画像

その集中力は本当にすごい。次男の東大合格を機に、安政さんは49歳で自ら東大受験を決意。50歳での合格へとつながったのである。

こうして、母と次男が東京、父と長男が長野という、家族別々の生活が始まる。早稲田大学政治経済学部へ進むことになった玲二朗さんが言う。

「東大生になった母は、家にいるころより、もっともっと勉強していた。それも前よりずっと、楽しそうに。息子ががらすこいと思いました。」

53歳の苦学生、生活費は奨学金

時令、東大生の家庭は高収入という報道が盛んだ。安政さんにも恵まれた環境の主婦なのだろうと想像している

「生活費は月1万1千円くらい、洗濯は家の洗濯機が1回100円なので、パンパンになるまでためて、一気に洗って(笑)。」

「苦学生」そのものの毎日は、楽しくてはなかった。特に、3年生のときに実現したフランス・ストラスブール大学への留学時には、美しい街並みや歩きながら、またラテン語の授業を受けながら、折にふれて夢がかなった感慨に浸っていた。

「苦学生」そのものの毎日は、楽しくてはなかった。特に、3年生のときに実現したフランス・ストラスブール大学への留学時には、美しい街並みや歩きながら、またラテン語の授業を受けながら、折にふれて夢がかなった感慨に浸っていた。

「苦学生」そのものの毎日は、楽しくてはなかった。特に、3年生のときに実現したフランス・ストラスブール大学への留学時には、美しい街並みや歩きながら、またラテン語の授業を受けながら、折にふれて夢がかなった感慨に浸っていた。

リズア

文庫

「生活費は月1万1千円くらい、洗濯は家の洗濯機が1回100円なので、パンパンになるまでためて、一気に洗って(笑)。」

「生活費は月1万1千円くらい、洗濯は家の洗濯機が1回100円なので、パンパンになるまでためて、一気に洗って(笑)。」

「生活費は月1万1千円くらい、洗濯は家の洗濯機が1回100円なので、パンパンになるまでためて、一気に洗って(笑)。」

「生活費は月1万1千円くらい、洗濯は家の洗濯機が1回100円なので、パンパンになるまでためて、一気に洗って(笑)。」

「生活費は月1万1千円くらい、洗濯は家の洗濯機が1回100円なので、パンパンになるまでためて、一気に洗って(笑)。」



卒業後は姫路の家に戻り夫と2人で暮らす。そして戯曲執筆という新たな夢にチャレンジ！「4月1日から執筆開始と決めています」

「息子たちと、クリスマスはストラスブールで、お正月はパリで迎えました。留学時代の最良の思い出です」

母に起きていた変化を、息子たちもまた見逃さなかった。玲二郎さんが言う。

「誰にも遠慮のいらぬ海外の留学先では、母は日本にいるときより生き生きとして見えました」

息子たちは、姫路にいたこ

ろ、母が実母との葛藤を通じ

て、日本社会ならではの「世間」という名の重圧に苦しんで

いたことを知っている。また

友人から「夫婦別姓なんて

て変わってるね」と言われて

も、自立した個々の人間である

生き方を貫く両親を誇りに

思っていたと語る息子たち。

姫路に残された形となった

悠二郎さんも、

「母が上京したあとは、料理

も自分で作るようになりまし

たが、負担に感じたことはま

たありません。

「まあ！ また、おきれいに

なりましたね」

同級生のじゅんさんの母親

が驚きの声を上げた。

じゅんさん母子とは入学当

初から親交があり、この日は

卒業式を控えてのランチ会。

リス間

何歳だって遅すぎることなんてない。好きならば、すべてはこれから！

「まあ！ また、おきれいになりましたね」

同級生のじゅんさんの母親が驚きの声を上げた。

じゅんさん母子とは入学当初から親交があり、この日は卒業式を控えてのランチ会。

「たくありません」

現在は京都で教育関係の職に就く玲二郎さんは、自分の

将来についてこう語った。

「いずれ自分が家庭を持つと

きも、うちみたいに一人一人

がやりたいことを自由にでき

て、それを互いに認め合うフ

ァミリーをつくりたいです」

家族にはいる人な形がある。

離れていても、お互いを思い

やり、支え合うことができる。

安政さんの思いは、息子た

ちに確実に伝わっている。

「おきれいなのは、本当にや

りたいことをやってらっしゃ

るからです。私たちが家

庭に入ると夢はいつたん取め

てしまつて、いつか忘れてし

まう。話題というのも、老後や介護の話ばかりになつて」

「いまも忘れられない光景がある。

「ファストフード店ではつたりお会いしたとき、それはもう真剣に教科書に向かっていた。その姿には驚きました。今ではうらやましい。ママさんを見ていて、私も好きなことを始めようと決めたんです」

じゅんさんが、大きくうな

ずきながら続ける。

「好きな道は、どんなことでも諦めないでチャレンジすべ

きということ。ママさん、に教わりました。どんな環境

も言い訳にはならないと、彼女が身をもって証明している

んです。この春から社会人になる私のお手本です」

照れながら聞いていた安政

さんだったが、次には今後の

プランを打ち明けてくれた。

ひとつの告白とともに。

「実は東大入学後も、共依存

を引きずっていました。突然

パニックになりました。キャンパス

内のクリニックに駆け込んだ

こともあるし、カウンセリン

グや授業も受けていて、フ

ランスにも薬を持参しました。

それが、東京で生活し、勉

強に没頭するなかで「私はも

うだじょうぶ」とふと実感

できたんです。もう母の目も

周囲の視線も気にしなくてい

いんだと。自力でできるだけのことをしてきた東大の学生生活が、私の人生を豊度変えてくれました。フランスで、人の目を気にしない生活を体験したのも大きかったですね。だから、いまは4月からの計画も臆せず話せます。戯曲を書き始めます。戯曲を書くんです！」

きつぱりと、笑顔で前を向いての宣言だった。

「大学院に進むつもりでしたが、夫の「帰ってほしい」という言葉で、姫路に戻ることを決めました。その決断で逆

に、本言にやりたいことが見えてきた。卒業執筆を通じて、書きたいテーマも決まりました。姫路に帰ったら、時間

夢のようにありますから！」

新たな人生の挑戦を支える

のも、5年間で得た体験だ。

「入学するまでまったく使えなかつたパソコンも、5年間で原稿を打てるまでになりました。ブランドタッチならぬ。人さし指タッチで、4月1日から書き始めます！」

55歳の東大卒業は、まだまだ終着点ではない。

ダイニングテーブルの。人さし指タッチ。から、新たに生まれる物語。真新しい一章を、未来に向かって紡ぎ出す。

取材・文／堀内雅一
撮影／中村香